神祭

遷宮で 結ぶ人の輪 心の輪

第六十二回神宮式年遷宮

三重県神道青年会報 第40号

（写真提供／神宮司庁）

平成二十四年度 定例総会

四月十八日、神社庁会議室に於いて石上会長以下役員会員二十九名、来賓二名の出席にて開催された。

開会儀礼に続き、来賓の石上紀男三重県神社庁長、藤森政一三重県氏子青年会会長より祝辞を頂戴し、その後菱川副会長を議長に選出、議事が進められた。

平成二十四年度の会務報告、会計決算報告、監査報告が行われ夫々承認された。次に役員改選が行われ、新会長に宮崎副会長が指名され、新役員を代表して新会長より挨拶があった。

（その他新監事・役員は四頁参照）

続いて二十五年度活動方針案並びに事業計画案・予算案が各々審議されて承認を受け、定例総会は滞りなく終了した。（横山昌佳　記）

新職員交流会

七月十七日、県営総合競技場体育館に於いて開催された。会長以下三十一名（新職員は十二名）が参加し、A～Jの十一チームに分かれ、バドミントンを楽しんだ。

どのチームも試合を経るごとに白熱した試合となり、最後はチームワークで秀でた三橋理事率いるCチームが優勝した。

その後は、神宮会館ラウンジに会場を移し、表彰式並びに懇親会が開催された。会長より改めて歓迎の挨拶があり、表彰式、新職員の自己紹介が行われた。遠方から参集してきた会員もいて、それほど長い時間ではなかったが、お互いに汗を流し、同じ環境にいる者同士の意見交換もでき、充実した時間を過ごすことができた。

（浅野嘉之　記）

神宮神青との合同研修会

七月二十二日、神宮司庁に於いて会長以下三十五名が参加して開催された。

会長挨拶の後、講師に三重県神道青年会副会長も務められた神宮の佐藤了古宮掌を迎え「遷御について」と題した講義を頂いた。

遷宮を目前に、神宮神職ならではの視点を踏まえながら、各所役、玉串の奉り方等の説明があり、遷御についての知識や内容などを分かり易く講義をして頂いた。三ヶ月後に控えた式年遷宮の遷御の儀における知識を尚一層深める事が出来、また、七月二十六日から行われるお白石持行事に向けて心引き締まる思いであった。最後に、神宮神道青年会菱川会長よりご挨拶を頂き、研修会を終了した。

研修会終了後会場を移し、懇親会が行われ、会員一同これまで以上に親睦を深めた。

（林　陽典　記）

二一～　お宮の子供会
二二日　一八名参加　多度大社
二七～　神青協夏期セミナー
二八日　五名参加　神社本庁

〈九月〉

九～　神道青年東海地区協議会
一〇日　並に教化研修会
　五名参加　中津川市内
一七～　東日本大震災復興支援活動
一九日　八名参加　福島県浪江町内
二一日　阿山・上野氏子青年の集い
　会長出席　伊賀市内
二七日　三重県敬神婦人連合会総会助勢奉仕
　一一名奉仕　神宮会館
　第四回役員会
　一三名出席　神宮会館

〈一〇月〉

二日　皇大神宮　遷御の儀助勢奉仕
　一〇名参加　内宮
五日　豊受大神宮　遷御の儀助勢奉仕
　一〇名奉仕　外宮
二三日　北部ブロック研修会
　九名参加　神社庁
三〇日　三重県神社関係者大会助勢奉仕
　一四名奉仕　神宮会館
　第五回役員会
　一三名出席　神宮会館

〈一一月〉

二五日　全国神社関係者大会助勢奉仕
　一〇名奉仕
　県営サンアリーナ

〈一二月〉

二日　東海地区協議会役員会・顧問会
　五名出席　岐阜市内
五日　第六回役員会
　一九名出席　神社庁

第三十四回 お宮の子ども会

八月二十一日・二十二日、桑名市鎮座の多度大社にて開催された。小学生二十九名の参加者とともに、会長以下十八名の会員が参加し、大変賑やかな中、開催することが出来た。

多度大社が馬に縁のあるお社ということもあり、「馬には乗ってみよ、人には添うてみよ」を主題に、日程を進めていった。

一日目は参加者全員での正式参拝に始まり、境内散策やゲーム、夜の庭燎の集いでは、恒例となる演劇や庭燎を囲んでの各班の出し物や花火と、盛り沢山の内容であった。子供達は初対面ながらもすぐに仲良くなり、どの活動も皆で楽しむ姿や、参拝作法を興味深そうに習得しようとする姿が印象的であった。

二日目は早朝に神社近くの多度峡天然プールにて禊を行い、また多度大社職員の朝拝にも皆で参加させて頂き、この子供会ならではの体験となった。子供達にもその雰囲気は感じ取ってもらえたのではないかと思う。

そして今回は、実際に神馬の「錦山」号に触れたり、仔馬に跨って歩いたりと、正に「馬に乗って」もらうことが出来た。中には馬を恐がる子もいたが、その子を気遣う子達の姿もあり、今回の主題以上のことを実践してくれていた子供達に、我々も学ぶべきところがあった。

「神道教化」という言葉は、こちらから何かを与えるような印象の言葉であるが、今回の子供会では私自身も何か大事なことを教えてもらったような、そんな子供会であったように思う。その意味からも、この事業の大きな意義を再確認させてもらった。（吉田実生　記）

神青協夏期セミナー

八月二十七日・二十八日に、神社本庁並びに皇居において、「真の皇室のお姿を拝して」と題して開催された。

当セミナーを通じて思い得たのは、両陛下が、日々国家の安寧を祈り、常に「国民と共に」というお考えを大切にされ、「象徴」という立場の在り方について、お考えになられているということである。

そして、本講義を終えて、皇室をいただく一日本国民、一神職として、実際に氏子崇敬者に対して、他人事とせず教化を行えるかが重要であり、後世に引き継いでいくことが我々の使命であることを痛感した。（堀川秀徳　記）

五日　忘年会
七日　二六名参加　武蔵
神宮大麻頒布促進運動
一九名奉仕
鈴鹿市南玉垣町

〈平成二六年一月〉
二二日　第七回役員会
一六名出席　猿田彦神社
新年会
三五名参加　庄や

〈二月〉
五日　建国記念の日啓発活動
（中部ブロック）
五名参加　近鉄津駅前
神宮・南部ブロック研修会
二三名参加　元坂酒造
七日　建国記念の日啓発活動
（北部ブロック）
八名参加
近鉄四日市駅前
八日　建国記念の日啓発活動
（神宮・南部ブロック）
五名参加　宇治橋前
二二日　氏子青年会との合同研修会
三名参加
陸上自衛隊久居駐屯地・外宮
二四日　中部ブロック研修会
六名参加　菅原神社

〈三月〉
六～七日　神青協中央研修会
八名出席　札幌市内
一三日　第八回役員会
一六名出席　神社庁
一九日　三重県護国神社合祀祭助勢奉仕
八名奉仕
三重縣護國神社

特集　第六十二回神宮式年遷宮

神宮お膝元の三重神青 二十年に一度の栄えある御奉仕

皇大神宮『遷御の儀』臨時出仕を御奉仕して

三重県神道青年会
会長　宮崎吉史

この度、第六十二回神宮式年遷宮遷御の儀にあたり、皇大神宮臨時出仕として御奉仕をさせて戴いた。

十月一日早朝、参籠所である修養団伊勢青少年研修センターに集合し、潔斎の後に大講堂にて臨時奉仕者一同、夕刻より斎行される川原大祓の儀の習礼を行った。午後四時、小雨のなか池田厚子祭主以下諸員五十鈴川のほとりの祓所に列立の後、川原大祓の儀が斎行された。私は御神宝辛櫃所役として、修祓行事ののち御神宝辛櫃を御正宮大床下まで担いだ。

二日は午前中に昨日と同様に習礼。松明所役として、参列員の傍らにて足元を照らす所役であった。同じく松明所役を仰せつかった奉仕員と念入りに習礼をした。夕刻、潔斎を終え著装の後、松明に火を灯し所定の位置に付き、午後六時の祭典開始の太鼓を待った。黒田清子臨時祭主以下諸員がお出ましになられ、最後に勅使が列立。約四時間に渡る遷御の儀が厳粛に斎行された。

神宮での最重儀である遷御の儀の御奉仕が叶いました事を感謝申し上げ、この経験を糧に神明奉仕に邁進したい。

川原大祓の儀（写真提供／神宮司庁）

『遷御の儀』助勢御奉仕

平成二十五年十月二日に皇大神宮で、また同月五日豊受大神宮において、それぞれ式年遷宮遷御の儀が執り行われたことは、周知の通りであります。

この皇家第一の重事、神宮無双の大営とされる式年遷宮において何よりも厳かな儀式である「遷御の儀」に際し、三重県神道青年会は宮崎会長以下役員をはじめ会員十五名は忝くも二十年に一度の栄えある御奉仕に恵まれ、あわせて奉拝の機会を賜わった。

十月二日、奉仕者は朝九時に内宮参集殿に集合した。接伴係として間違いの無いよう説明を受けた後、現場を確認し現正宮最後の参拝を行った。

午後一時に一般参拝者の参入が停止され、午後二時に受付が開始。三重神青会員は三重氏青会員とともに全国から次々とお越しの特別奉拝者の方々を三色に色分された胸の徽章と席番号より、正宮前から新宮前にかけて設置された特別奉拝席への案内を適宜ご奉仕申し上げた。中には車椅子でお越しの方や海外からお越しの方もお見えになり、戸惑いながらも清々しく奉拝して頂けるよう精一杯ご案内申し上げた。

午後八時、すべての灯りが消され雅楽の音色とともに絹垣に囲まれた御神体が新宮にお遷りになるのを奉拝した。

入御後、特別奉拝席の照明が点灯をされると奉拝者は一同拝礼をして退出。我々接伴係は退出誘導に際して混乱することないように、ブロックごとに分割された席を順次ご案内申し上げ、無事に皆様は宮域内をお帰りになられた。

奉拝者の方々が帰路に着かれた後も、忘れ物の有無などを確認し、遷御の儀が申し納められるのを待ち、新宮に参拝し、興奮覚めやらぬ裡に奉仕を納めた。（横山昌佳　記）

御樋代木奉迎祭

長野県と岐阜県で伐り出された御樋代木は、平成十七年六月八日に三重県入り。桑名・中臣神社、聖武天皇社、三重県護国神社にてそれぞれ奉迎祭が斎行された。神青会員は、桑名・中臣神社、護国神社にて夜警を行い、御樋代木の奉護に努め、無事伊勢の地へ到着した。

お木曳行事

平成十八年七月三十日に中野雅史会長（当時）以下十名の会員が、桜が丘奉曳団の一員として助勢した。ソリに載せられた御神木を旧神領民と共に力を合わせ、「エンヤー！」の掛け声で綱を曳いた。最後の神域までは、「エンヤ曳」で一気に曳き上げ、神域は奉仕者の満足の笑顔で溢れ万歳三唱の声がこだましていた。

三重神青　御遷宮　あれこれ

宇治橋渡始式

平成二十一年十一月三日、晴天に恵まれ、宇治橋渡始式が斎行された。神田基会長(当時)が代表として参列、会員十二名が誘導案内の助勢奉仕した。渡女一家を先頭に大宮司以下神職、そして、全国から選ばれた三代夫婦六十組が列を成し、宇治橋を渡った。

お白石拾い

平成二十四年十月十六日に神社本庁・伊勢神宮奉仕会の共催により開催され、宮田副会長以下二名が参加した。近年、上流に建設されたダムの影響により、良質な白い石が減少しており、探すのが困難であった。今回拾い集めた石が一つでもお白石として御敷地に奉献されたことを期待したい。

東海地区協議会 遷宮啓発研修会

平成二十五年二月十八日、東海地区青年神職三十五名が神宮司庁に集い開催された。当日は、石上陽祥会長(当時)以下十一名が参加。「式年遷宮について」をテーマに、音羽悟神宮主事を講師に迎え、ご講義を頂いた。次代への伝承の大切さと我々が担う責務の重さを痛感した。

お白石持行事

平成二十五年八月十七日に宮崎会長以下十六名の会員が桜が丘奉曳団の一員として奉仕した。当日は好天に恵まれ、暑い日差しに負けぬよう外宮までお白石を載せたソリを曳いた。新御敷地へ参入すると真新しい御正殿を拝見し、清々しい気持ちでお白石を納めた。

三重神青　御遷宮　あれこれ

浜参宮奉仕

二見興玉神社に奉職する神青会員からの寄稿――

二見興玉神社　権禰宜　小倉孝之

浜参宮とは、神宮の諸行事、また重儀に奉仕する前に、二見浦にて心身を清める参拝を言う。無垢塩祓は簡素な儀式であるが、皆で潔斎をし、気を引き締め連帯感を確認する、その意義が奥深い。

昨年四月よりのお白石奉献団本部の参拝に始まり、地元の旧神領民・お白石奉献団七十一団、一万五千人が浜参宮に訪れました。

又、七月二十六日から九月一日にかけては、特別神領民として一日に三千五百人が参拝され、全国津々浦々より七万五千人の方々が、夫婦岩の沖合の海中に鎮まり坐す御祭神・猿田彦大神御降臨の地、興玉神石より採取されました御霊草・無垢塩草にて祓いを受け、心身の浄化をはかり皆一段と結束を深められました。境内に溢れる白地に伊勢の染め抜きの法被も夏空に眩しく、晴れやかなその姿から、御遷宮への奉献気運を感じさせて頂きました。記録的な猛暑の中、皆一様に額に汗を浮かばせながら、寄せては返す白波の如く御神前に御参拝下さいますお姿は、日本人の敬神の念の厚さ、太古より多くの崇敬を集めてきた伊勢の地・心の原点を改めて確認させて戴きました。

東日本大震災復興支援活動

九月十七日から十九日の三日間、会長以下八名にて福島県浪江町に御鎮座の苕野神社（くさのじんじゃ）で復興支援活動を、福島県神道青年会の方々と共に行った。

震災後二年間放置された苕野神社は、津波によって運ばれた砂に一面覆い尽くされ、雑草が生い茂り、どこに社殿があったのか、参道がどこなのか全く分からない状態であった。

作業は九時から十四時半まで行われ、午前中は主に境内に生い茂った雑草を刈る作業を、午後からは境内に散乱している流木や倒れた灯籠、また参道に積もった砂の除去を行った。

作業終了後は、帰宅困難区域内の現状視察を行った。倒壊している家や折れ曲がった電柱、陸に上がった舟など、震災当時の状態がそのまま残っていた。原発の影響で家があるのに人がいない状態で、何と言ってよいのか、本当に言葉にならなかった。メディアは原発の問題を多く取り上げているが、被災した町において、復興の「ふ」の字も行なわれていないこの現状を、もっと伝えるべきだと感じた。

今回の活動を通して、自分の家に住める有り難さ、仕事が出来る有り難さを改めて感じた。この気持ちは実際に行ってみないと解らない。是非一度、被災地を訪れて、目で見て、肌で感じていただきたい。今後も多くの方々が、復興支援活動に携わって行くかと思うが、現地での活動だけに留まらず、この現状を皆に伝えていくことも、復興支援活動の一環であると感じた。

今回活動を行った場所は、現在避難準備解除区域に指定されているため、九時から十六時の間にしか立ち入る事が出来ない所であり、限られた時間での作業で震災前の境内に戻すことができなかった事が心残りではあるが、微力ながら復興のお手伝いが出来た。

（大野一省　記）

震災前の苕野神社拝殿

建国記念の日啓発活動

本年は美女撫子の種配布

●北部ブロック
一、日　時　二月七日（金）
一、場　所　近鉄四日市駅
一、参加人数　八名
一、配布数　一、〇〇〇袋

●中部ブロック
一、日　時　二月五日（水）
一、場　所　近鉄津駅西口
一、参加人数　五名
一、配布数　六〇〇袋

●神宮・南部ブロック
一、日　時　二月八日（土）
一、場　所　宇治橋前
一、参加人数　五名
一、配布数　二、四〇〇袋

北部ブロック

中部ブロック

神宮・南部ブロック

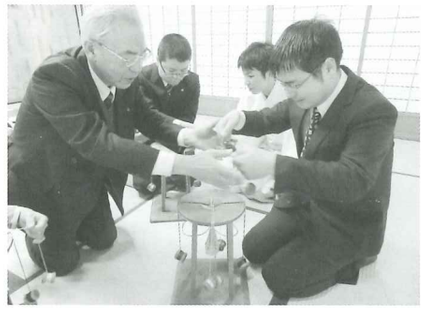
第十二回　ブロック研修会

●北部ブロック
一、日　時　十月二十三日（水）
一、場　所　三重県神社庁
一、参加人数　九名
一、研修内容　祭式研修会

●中部ブロック
一、日　時　二月二十四日（月）
一、場　所　菅原神社（伊賀市上野東町）
一、参加人数　六名
一、研修内容　伊賀組紐体験

●神宮・南部ブロック
一、日　時　二月五日（水）
一、場　所　元坂酒造
一、参加人数　二十三名
一、研修内容　酒造りについて学ぶ

北部ブロック研修会



中部ブロック研修会

神宮・南部ブロック研修会

神道青年会 東海地区協議会 並びに教化研修会

九月九日、中津川市付知町御鎮座の護山神社に参拝、アートピア付知にて研修会、総会、懇親会が開催され、会長以下五名が参加した。

先ず、『御杣山を歩く』～昔の手振りそのままに～と題して㈲つけち創工社牧野義則社長による講義が行われた。当初の予定では、「裏木曽御用材伐採式」が斎行された山林を歩く予定だったが、前日の大雨による土砂崩れにより中止され、大変残念な結果であった。

牧野講師は、今回の神宮式年遷宮においても、長野県で斎行された「御杣始祭」、岐阜県で斎行された「裏木曽御用材伐採式」では、御用材の伐り倒しに奉仕する若き杣夫たちに「三ツ伐り」を指導され、東海地区をはじめとする林業関係の協会・組合の重責を担われた方である。この「三ツ伐り」という伐採法は、木曽地方で古くから貴重な材木の伐り倒しに用いられる伐採法であり、講義の中でも映像を見ながら、大変分かり易くご説明頂いた。日本の素晴らしい伝統や私達が忘れつつある自然との共生を再確認した研修であった。

研修会終了後、神道青年会東海地区協議会総会が行われた。梅村幸司会長による挨拶、黒田和朗岐阜県神社庁副庁長をはじめ御来賓より祝辞を賜り、続いて小泉衛右議長のもと議事が進められた。

二日目の親睦会は、フェスティカサーキット瑞浪に於いて、親睦会として、県対抗カーレースを行った。タイムアタック・団体レース・県会長レースがあった。どのレースも白熱した戦いであり、特に県会長レースでは、宮崎会長が、途中まで首位をキープしていたが、ガス欠によりリタイヤしてしまったことが大変悔やまれた。

総合結果で、三重県は四位であったが、改めて結束力を強くすることができた。

（芦原工記　記）

神宮大麻頒布 促進運動について

十二月七日、鈴鹿市南玉垣町鎮座の彌都加伎神社（遠藤龍夫宮司）にて行われた。会長をはじめ十八名が参加し、寒空の中ではあったがそれぞれ頒布活動に励んだ。

まず彌都加伎神社斎館にて会長挨拶の後、活動における打ち合わせと諸注意が行われた。活動の前には遠藤副会長奉仕のもと正式参拝が行われ、四班に別れ担当地域の頒布を行った。班編成はそれぞれ経験者と初心者を混ぜての構成となっていた為、経験者が初心者や実習生を先導し活動を行った。

まず、昨年大麻を受けていただいた家を中心に頒布活動を行った。昨年同様に大麻を受けていただけるか不安もあったが、多くの家庭で快く大麻を受けていただいた。中には「お待ちしてました」と声をいただける家もあり、継続からなる神道教化の重要性を身にしみて感じた。

次に新規に受けていただく家々を回ったが、先輩方が苦労されたように、インターホン越しに断れる事も多く、改めて大麻頒布の難しさを実感した。しかし、遷宮を通しての神社広報活動が実を結んでか、玄関を開いてくれた家庭では、氏神様から伺った事と神宮の御札を説明すると、関心を持っていただき、受けていただける家庭もあった。

その後も午前午後共に頒布活動に従事し、この日は全体で神宮大麻 九十七体 彌都加伎神社札 九十九体 頒布を行った。本年は前年に比べ新規の家庭が多く、私も七件の家庭で新たに大麻を受けていただくことが出来た。恒例または新規に限らず出向いた先で相手の感謝の言葉と共に大麻を渡せたのは、社頭では得る事が出来ない神職としての喜びを感じた。この気持ちを忘れることなく今後も日々の奉仕に励んで行きたい。

（佐師正康　記）

氏青協議会との合同研修会

二月二十二日、恒例の合同研修会が陸上自衛隊久居駐屯地及び外宮に於いて開催され、会長以下四名が参加した。

先ず、陸上自衛隊久居駐屯地では、装備品や軽装甲機動車等を見学。その後、東日本大震災での救助活動や国防について自衛隊三重地方協力本部長の木戸口和彦一等陸佐により講義を拝聴した。

久居駐屯地見学後、外宮へ移動。御垣内参拝の後、旧御殿の拝観をさせて頂き、井関宮掌より御正殿等の説明を頂いた。二十年の月日を感じ、次の御遷宮に向けて、神宮の神徳宣揚に努めたいと感じた。

（芦原工記　記）

神青協中央研修会

三重県一志郡出身の松浦武四郎が明治二年（一八六九年）に、蝦夷地を「北加伊道（北海道）」と名付けて今年が百四十五年目。この節目の年に、北海道は札幌パークホテルにて、三月六日から二日間にわたり開催され、当会からは、会長以下七名が参加した。

この度の研修は「国土と国体を守る」をテーマに、日本を取り巻く現状と今後について、更には道義国家としての日本人の精神風景等について御講義頂いた。

まず、第一講目は東海大学教授山田吉彦先生による「日本の海を守る」と題して、御自身が関わった尖閣諸島の東京都購入のお話や、中韓による外圧から日本の領土・領海・海洋資源保護ついて御講義頂いた。私自身、帯廣神社に奉職していた時は、何度も根室や羅臼へ行き、北方領土を見て身近に領土問題を感じていた。しかし、三重県に来てからは気持ちの上でも遠い問題となっていた中、この御講義により再度強く認識する事が出来た。

第二講目は、俳優津川雅彦先生による「日本の誇り」と題して、東日本大震災を例に、「苦境の中でも我慢・忍耐・礼節を弁え、大混乱の中でもお互いを助け合う事は日本民族の持つ美しい精神である。この様な精神を持つ日本人はもっと誇りを持つべきである。」とのお話であった。

第三講目は、ジャーナリスト大高未貴先生により「対日情報戦に備へよ！日本の誇りを取り戻そう」と題して、日本国内の反日マスコミの報道姿勢や従軍慰安婦問題・南京大虐殺問題に於ける、中韓のロビー活動について事細かに御講義頂いた。そして現在それに反論する為の活動についてもお話しされた。

講義の結びに「日本人は長年先方の言いなりになり過ぎた為、現在の情勢がある。今後はもっと積極的に動き、しっかりと反論し周囲に理解を求めるべきである。そして、多くの方々と接する皆さん方には益々頑張って頂きたい」との言葉は、とても印象的で身の引締まる思いだった。

今回の研修会で日本の現状を再認識し、学び感じた事を地元の人々に如何に伝えて、そして考えて頂ける様、私自身更に努めねばならないと思った。（荒井之也　記）

特別寄稿

第六十二回神宮式年遷宮

神宮宮掌　大野由之

昨年は、第六十二回神宮式年遷宮のうち皇大神宮・豊受大神宮・荒祭宮・多賀宮の儀が滞りなく奉仕され、一息つく間も無いままに今年は残る十二別宮の遷宮諸祭儀が順次奉仕されてゐます。今次遷宮は現在進行中であり、全体を振返るには来年まで待たねばなりませんが、遷宮最大の御儀である正宮の儀について思ひ返してみます。

今次遷宮に向けては全国的な広報活動やパワースポットブームなどにより神宮や遷宮への関心が高まり、大変多くの方が神宮式年遷宮の姿をご覧になりました。そこで既にお気付きでせうが、前回と今回とでは遷宮の内容に若干の変化がありました。

一つは殿舎の飾金物の様式です。飾金物に限らず遷宮で新調される殿舎や御装束神宝の様式は平安時代に朝廷が定めた『延喜式』に記載されますが、永い歴史の中でその様式に時代の影響が及び、少しづつ変化が加はりました。それを原初の様式に復さうとの努力は明治時代から続けられ、今次遷宮では殿舎の飾金物について現存資料に依り詳細を確認し得る最古の様式となる鎌倉時代の様式を復元出来ました。

もう一つは御装束神宝の材料や調製技術の復古です。時代と共に日本の伝統工芸からその伝承が途絶えかけた素材や技法を、関係者の努力により今次遷宮の上に甦らせることが出来ました。詳細は外宮のせんぐう館にて紹介してをります。

そして、その飾金物と御装束神宝を納める辛櫃を本来の都風である漆塗りに復し、その読合の儀に神宝使の御差遣を賜った事です。これらは遷宮が都におはします天皇の行はせられる御儀であるといふ本義を象徴的に示すものです。

神宮式年遷宮は「朝家之大営」（『兵範記』）、「皇家第一の重事」（『遷宮例文』）であり、その斎行は天皇陛下の御聴許の下に進められます。今次遷宮が斯くも有意義な斎行を迎へられたのも、そこに畏き思召しがあり、それを仰ぐ多くの国民の努力が結集した精華に外なりません。就中、故実究明に基づく今次遷宮での古儀復興は遷宮史上に銘記されてよいでせう。

近年では「神宮真姿顕現」といふ言葉も聞かれなくなって久しく、青年神職には死語となってゐるでせうが、問題の禍根は未だ残されてゐる以上、いつかまた青年が威勢に任せて叫ぶ日が来るかも知れません。しかし、神宮真姿顕現とは、神宮制度是正といふ憲法法律の改正を求める大がかりな課題が全てではありません。今次遷宮に見る如く、地道で緻密な故実と現実の研究によって成される事もあります。何事につけ、大きな掛け声よりも先づ堅実な研鑽努力の蓄積こそが大きな成果となることを知るべきです。そして、神青の活動もそれをよく認識したものでありたいものです。

編集後記

「榊葉四十号」を無事発行することができました。会員各位のご協力に厚く御礼申し上げます。

今号は昨秋斎行されました、第六十二回神宮式年遷宮の諸行事について特集を組ませて頂きました。

平成十七年の御樋代木奉迎送より多くの会員が携わり、集大成たる遷御を目出度く迎えられたことは、万感迫るものがありました。

内宮「遷御の儀」では当県を代表し宮崎会長が臨時出仕を、また会としても接伴係を御奉仕するなど、神宮御鎮座県の神青として得難い機会も賜りました。これも偏に会員諸兄が培ってきた赤誠の賜物と、心より感謝を申し上げます。

さて、平成二十八年三月には、三重県神青が担当にて神青協神宮研修会が開催されます。来年度から、諸準備で忙しい年となります。会員の皆様方の尚一層のご協力を宜しくお願い致します。（林）

会報「榊葉」
第40号
平成26年3月31日
発行者　宮崎吉史
編集　総務広報委員会
発行所　伊賀市下郡591
猪田神社内
三重県神道青年会